



日本植物分類学会

ニュースレター

No. 2

Aug. 2001

目 次

会長および評議員選挙の結果について	2
評議員追加選出について	2
会長あいさつ	3
新評議員あいさつ	4
日本植物分類学会 2001-2002 年度役員等の構成	4
諸報告	
合同幹事会の報告	6
評議員会開催のお知らせ	6
日本分類学会連合（仮称）について	6
お知らせ・募集	
学会費納入のお願い	7
日本植物分類学会第 1 回大会のおしらせとシンポジウム企画公募	8
2002 年度大会開催地の募集	8
第 1 回（平成 14 年）日本植物分類学会賞受賞候補者の募集	9
新学会ホームページのお知らせ	9
昭和聖徳記念財団平成 13 年度学術助成のご案内	10
平成 13 年度（第 23 回）沖縄研究奨励賞推薦候補者募集	10
自然史学会連合シンポジウムのご案内	11
バックナンバー販売のお知らせ	12
野外研修会報告	13
第 19 回植物学国際シンポジウムに参加して	15
連絡員から夏便り	
コケ便り・1・	20
北方草木便り・1・	21
会員消息	22
付録「植物分類,地理」巻号数と発行日の対応表	

会長および評議員選挙の結果について

選挙管理委員長 鈴木武

日本植物分類学会ニューズレター No.1 で公示した会長および評議員選挙の開票を、2001年6月20日に兵庫県立人と自然の博物館会議室2において、高野温子・布施静香両氏の立ち会いのもとで行いました。結果は以下の通りです。

【会長】

当選 加藤 雅啓 55 票

次点 福岡 誠行 48 票

(有効投票 171 票)

加藤雅啓氏が会長に選出されました。

【評議員】

当選 永益 英敏 74 票

邑田 仁 56 票

角野 康郎 53 票

村田 源 46 票

伊藤 元己 39 票

植田 邦彦 36 票

北川 尚史 36 票

田村 実 33 票

次点 藤井 伸二 31 票

(有効投票 168 票)

永益英敏・邑田仁・角野康郎・村田源・伊藤元己・植田邦彦・北川尚史・田村実の8名が評議員に選出されました。

評議員追加選出結果について

評議員 永益英敏

選挙管理委員長の報告にありますとおり、評議員として私ども8名(伊藤元己、植田邦彦、角野康郎、北川尚史、田村実、永益英敏、村田源、邑田仁)が選挙により選出されました。「役員等の選出についての細則」第4条の規定にもとづきまして、この8名の合議により、川井浩史(神戸大)、高相徳志郎(琉球大)、西田治文(中央大)、原田浩(千葉県立中央博)の4氏を評議員として追加選出いたしましたので報告いたします。

会長あいさつ

加藤雅啓

会員の皆様お変わりありませんか。先日の選挙で新しい会長、評議員が選出され、新学会が本格的に活動を開始しました。日本植物分類学会(旧)と植物分類地理学会(旧)が統合されて誕生した新しい日本植物分類学会の会長に選ばれて、会員各位からの期待の大きさをひしひしと感じる一方、新学会の前途に待ち構える数々の課題の大きさを考えると身の引き締まる思いで一杯です。改めて会長の重責を実感しています。

これまでの統合の経緯を改めて振り返ってみますと、我が国の植物分類学を一層発展させるために、植物分類学関連の学会が相互の交流を深め、可能な事柄から合同で実行することを目的にして、「植物分類学関連学会連絡会」が6年前(1995年)につくられました。合同会員名簿の発行、シンポジウムの(日本植物学会における)開催などをすすめる一方、以前から希望されていたことですが、植物分類学の分野での国際的な雑誌(英文誌)を共同編集する可能性なども探ってきました。その結果、もっとも実現可能な策として両学会が学会そのものを統合して雑誌を充実させる案が浮かび上がってきました。もともと両学会はそれぞれの経緯を経て設立され独自の活動を行ってきたのですが、近年はそれぞれが発展してきたこともあって、独自色が薄められ似た面が多くなった学会として併存するようになり、その存在意義を問い直す意見も出るようになりました。一方、小さな学会よりも大きな学会の方が学界での発言力や社会的なインパクトが増すこと、また2つの学会の役員の一部が両学会の役員を兼ねて負担が大きく、力が分散しがちなことも学会統合を模索する一因になったこともたしかです。統合案がでたのは2年前のことで、それ以後2年という期間をかけて検討を重ね準備をすすめて、去る5月12日にめでたく新学会が設立できたことはご記憶に新しいことと思います。

6月28日に開かれた新旧幹事間の引き継ぎの会議でも確認されたことですが、新学会という器ができたことはご同慶の至りではありますが、それは序の口でしかありません。学会を発展させるという統合の目的を実現するためにどのような活動の内容をそこに盛り込むかが何にも増して重要であることはいうまでもないことです。そのために、新役員に期待されている任務は統合に至るまでの過去2年間よりもはるかに大きいと言っても過言ではありません。引継会議では野外観察会、ニュースレター、APG(英文雑誌)、「分類」(和文雑誌)の充実などについても話し合わせ、一同身の引き締まる思いを共有した次第です。これらの活動を通じて本学会の発展に微力を尽くす覚悟ですので、会員の皆様の建設的なご助言とご協力をお願いいたします。

また、本年度から、調査研究等を通じて学会の発展に貢献した会員を顕彰するために「日本植物分類学会賞」が設けられました。会員の中には、受賞されるのに相応しい方が大勢おられます。適当な方を自薦、他薦を問わず推薦していただき、学会賞が一日も早く本学会に根づくことを期待します。

(会長あいさつ続き)

先日、動物・植物の分類学関連の学会の責任者がはじめて一堂に会し、学会の現状と将来について意見を交換し、全生物をカバーする学会連合をつくる方向でさらに検討を続けるという画期的ともいえる合意がえられました(「日本分類学会連合について」を参照)。この動きは植物分類学関連学会連絡会の活動をさらに発展させるものであり、かつ本学会設立の流れに合致するものと判断しています。また、国際的には2004年にIAPT(国際植物分類学連合)のシンポジウムを日本で開き、それを本学会が主催することも予定されています。これも本学会を発展させる重要なイベントになると思います。なお、開催に向けて準備委員会を発足させました(庶務幹事の「役員等の構成」報告参照)。

新評議員あいさつ

永益英敏

勝手ながら新評議員を代表しまして御挨拶申し上げます。本学会最初の選挙による評議員に選出されたことを光栄に感じますとともに、重い責任を感じています。統合による新しい学会として、本学会の母体となった(旧)日本植物分類学会と植物分類地理学会のよい点を引継ぎ発展させつつ、新学会ならではの特色を創っていくことが必要です。(旧)日本植物分類学会よりも多い12名の評議員が選ばれましたが、多様な分野・研究対象をカバーする日本植物分類学会ですから、けして充分とはいえません。学会のあり方について、会員の皆さんが執行部や評議員に積極的に御意見をお寄せくださることを期待しています。最後に、設立当初の役員の方々の御尽力のおかげで、円滑に新体制に移行できましたことを感謝いたします。

日本植物分類学会 2001-2002 年度役員等の構成

庶務幹事 梶田忠

今期の役員等が下記のように決まりましたのでご報告します。

会長	加藤雅啓(東京大)
庶務幹事	梶田忠(東京大)
会計幹事	高野温子(兵庫県博)
編集委員長	岡田博(大阪市立大)
ホームページ担当幹事	藤井紀行(東京都立大)
図書幹事	布施静香(兵庫県博)
植物分類学関連学会連絡会担当幹事	綿野泰行(千葉大)
自然史学会連合担当委員	西田治文(中央大)

関西地区講演会担当委員 福岡誠行（頌栄短期大）
ニュースレター担当幹事 西田佐知子（名古屋大）

評議員 伊藤元己（東京大）、植田邦彦（金沢大）、角野康郎（神戸大）、
川井浩史（神戸大）、北川尚史（奈良産業大）、高相徳志郎（琉球大）、
田村実（大阪市大）、永益英敏（京都大）、西田治文（中央大）、
原田浩（千葉県博）、村田源、邑田仁（東京大）

編集委員

秋山弘之（和文誌編集責任者：兵庫県博）、伊藤元己（東京大）、
角野康郎（神戸大）、瀬戸口浩彰（京都大）、高橋正道（新潟大）、
高宮正之（熊本大）、永益英敏（京都大）、西田治文（中央大）、
野崎久義（東京大）、原田浩（千葉県博）、村上哲明（京都大）、
邑田仁（東京大）

Editorial Board

David E. Boufford (Harvard University), Madjit I. Hakki (Botanischer Garten und
Botanisches Museum Berlin-Dahlem), De-Yuang Hong (Institute of Botany, Academia
Sinica), Jae-Hong Pak (Kyung-Pook National Univ.), Ching-I Peng (Institute of Botany,
Academia Sinica)

ニュース連絡員

河原孝行（森林総合研）、高宮正之（熊本大）、傳田哲郎（琉球大）、
西村直樹（岡山理科大）

絶滅危惧植物専門第一委員会委員長 井上健（信州大）

絶滅危惧植物専門第二委員会委員長 長尾英幸（筑波大）

植物データベース専門委員会委員長 伊藤元己（東京大）

IAPT シンポジウム 2004 準備委員会

岩槻邦男（委員長：放送大）、秋山弘之（兵庫県博）、
加藤雅啓（東京大）、田村実（大阪市立大）、永益英敏（京都大）、
野崎久義（東京大）、村上哲明（京都大）、邑田仁（東京大）

学会賞審査委員会

永益英敏（委員長：京都大）、伊藤元己（東京大）、北川尚史（奈良産業大）

諸報告

合同幹事会の報告

庶務幹事 梶田忠

日本植物分類学会新旧合同幹事会が2001年6月28日(木)に、大阪市立大学文化交流センター中セミナー室で開かれました。新旧各学会から以下8名の参加を得て、各職務の引き継ぎを行うと共に、職務内容全般について協議しました。

(新)日本植物分類学会：秋山弘之、岡田博、梶田忠、加藤雅啓、高野温子、西田佐知子、布施静香

(旧)日本植物分類学会：秋山弘之、加藤雅啓

植物分類地理学会：秋山弘之、岡田博、高橋晃、西田佐知子

評議員会開催のお知らせ

会長 加藤雅啓

今年度は新学会の発足等で、例年とは異なる日程で学会の活動が進んでいます。発足まもない段階での活動状況をチェックしていただき、ご提案・ご意見をちょうだいするために、日本植物学会第65回大会の際に(平成13年9月25~29日)評議員会を開催します。予定している議題は、予算のあり方、出版物(英文誌、和文誌、ニュースレター) 科研費申請(出版助成関係) 学会賞、GBIF関係、IAPTシンポジウム2004、他です。審議する事柄についてご意見、ご希望がございましたら、評議員、会長、幹事・委員のいずれかにお伝え下さい。なお、評議員等には後日、評議員会の日時、会場などをご連絡いたします。

日本分類学会連合(仮称)について

井上 健(信州大学)

分類学の関連学会が連携をとりながら、分類関係の活動を合同で行おうという組織として、植物関係では植物分類学関連学会連絡会(以下植物連絡会と略す)、動物関係では動物分類学関連学会連合(以下動物連合と略す)がある。植物連絡会は1995年に正式発足し、英文誌の共同発行の話し合い・シンポジウムの共同開催・共同名簿の発行などの事業を共同で行ってきた。動物連合の方は発足したのは2年前とかなり後だが、動物分類学関連学会の連合体として、今年国際シンポを開催するなど、積極的に活動している。

さる6月27日に、植物連絡会と動物連合の関係者が集まり、動植物の分類群を横断する形で分類学関係の学会の連合体(「日本分類学会連合」(仮称))を作ることが可能かど

うかという話し合いが持たれた。植物関係者としては、加藤、柏谷、川井、鈴木、伊藤、綿野、井上の7名が出席した。加藤会長より会議の内容などを記事として書くように要請があったので、報告する。

植物連絡会などこれまでの活動から見て、分類学会連合がその延長線上にあることは誰しも認めるところであったが、会議の内容は動植物で連合することにより、具体的にどのようなメリット・デメリットがあるかという点に集中した。連合をつくるメリットとして、以下のものが挙げられた。まず、第一に経済的な点である。科研費の獲得などに対して積極的に対応できる。また、生物のデータベースや環境アセスのような事業に、分類学会連合が窓口になれば、研究資金やポストクの就職先として期待できる。第二に分類学会連合のような分類学の関係した団体の集合体があれば、分類学全体の社会的な地位の向上につながり、上記のような色々な分類学関係の事業の受け皿として機能できる可能性がある。デメリットとして、分類学会連合としてあまり上手く機能せず、分担金に見合うだけのメリットが得られないことなどが考えられる。その場合でも参加学会は分類学会連合から脱退すれば済む問題で、大きなデメリットとはならないだろう。

以上のような議論を踏まえて、会議の出席者の間では、分類学会連合を結成するための準備委員会をつくり、準備委員会から分類学に関連する学会や個人に参加を呼びかけることになりました。正式な連合への参加要請文は、別の記事で送られてくると思いますが、とりあえず、分類学会連合結成の準備状況をお知らせします。なお、来年1月に連合設立総会を開く予定で準備がすすめられています。

お知らせ・募集

学会費納入のお願い

会計幹事 高野温子

本学会の今年度(2001年度)会費の納入を受け付けております。ニュースレター今号に振込用紙を同封しましたので、まだ納入されていない方はこの機会にご入金ください。

旧学会で2001年度分まで納入済みの場合は、その分を新学会の会費に移行させていきますので、納入いただく必要はありません(差額の納入は必要です)。(旧)植物分類地理学会員の方は、振込口座が変わりましたのでご注意ください。(旧)日本植物分類学会員の方は、会費金額が異なりますのでご注意ください。

一般会員 5,000 円、学生会員 3,000 円です。

口座番号：00120 - 9 - 41247

名 義：日本植物分類学会

新学会の円滑な運営は、ひとえに会員皆様からの会費納入にかかっておりますので、よろしくご協力お願いいたします。

日本植物分類学会第1回大会のおしらせとシンポジウム企画公募

日本植物分類学会第1回大会は次の通り開催する予定です。

(1) 会場 国立科学博物館新宿分館 (新宿区百人町 3-23-1)

(2) 日程 2002年3月15日—3月17日(3日間)

3月15日(金) 午後 シンポジウム

3月16日(土) 午前 一般講演

午後 ポスターセッション

夕方 懇親会

3月17日(日) 午前 一般講演

(エクスカージョンの予定はありません)

(3) 大会に関する連絡先

〒305-0005 つくば市天久保 4-1-1

国立科学博物館 土居 祥兌

電話 0298-53-8973 ファックス 0298-53-8401

E-mail: y-doi@kahaku.go.jp

この大会におけるシンポジウムの企画を募集します。企画をお持ちの方は9月30日までに、(i) シンポジウムのタイトルと簡単な趣旨、(ii) 予定講演者名(以上あくまで準備段階のもので結構です)、オーガナイザー名とその連絡先、(iii) 企画の概要などを土居までご連絡下さい。

なお、大会の詳細及び参加申し込みのご案内は、次号のニュースレター(11月号)でお知らせします。

2002年度大会開催地の募集

庶務幹事 梶田忠

平成14年度(2002年度)の第2回大会開催地を募集いたします。大会開催にあたっては、講演会場(約150名収容可能なもの)、クローク、本部、休憩室、ポスター発表会場等のスペースが必要となります。また、大会中に評議員会等の会議室をお借りすることとなります。大会前の準備としては、大会案内と大会申し込み書の作成、プログラム編成、要旨集の編集・発行、懇親会会場の選定などがあります。大会運営は学会からの補助金(10万円)と参加費で行っていただきます。大会をお引き受け下さる(あるいは詳しい話によっては引き受けても良い)という会員の方は、2001年12月22日までに下記庶務幹事宛にご連絡を御願いたします。ご参考までに、(旧)日本植物分類学会の大会開催地は学会ホームページ(<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/jsps/>)でご覧になれます。

〒112-0001 東京都文京区白山 3-7-1

東京大学大学院理学系研究科附属植物園内

日本植物分類学会事務局 庶務幹事 梶田忠

電話 03-3814-2625 ファックス 03-3814-0139

E-mail: tkaji@bg.s.u-tokyo.ac.jp

第1回（平成14年）日本植物分類学会賞受賞候補者の募集

本学会は平成13年5月に、(旧)日本植物分類学会と植物分類地理学会が統合された新学会として発足しました。新しい事業として日本植物分類学会賞を制定し、調査および研究の業績を通して、本学会の発展に貢献した会員を顕彰いたします。プロ的、アマチュア的などの如何を問わずさまざまな内容の調査と研究を幅広く対象にします。以下の要領で日本植物分類学会賞受賞候補者を募集いたします。自薦、他薦を問いません。会員の皆様の積極的な応募を期待しております。なお、受賞候補者の選考は「学会賞についての細則」に定める学会賞審査委員会で行います。

応募要領

1. 資格：本学会の会員ならどなたでも応募できます。
2. 応募方法：以下の事項をA4用紙に記入して(書式自由)日本植物分類学会事務局
日本植物分類学会賞審査委員会宛にお送り下さい。
3. 記入事項
 - (1) 略歴(生年月日、学歴、職歴)
 - (2) 調査・研究の簡単な説明
 - (3) 業績(本学会の大会発表記録、著書、論文などの業績リスト。できれば代表的なものの別刷、コピーを添付して下さい)
4. 申込み先・問合せ先：日本植物分類学会事務局日本植物分類学会賞審査委員会
〒112-0001 東京都文京区白山3-7-1
東京大学大学院理学系研究科附属植物園内
電話 03-3814-2625 ファックス 03-3814-0139
E-mail: tkaji@bg.s.u-tokyo.ac.jp
5. 応募締切日：平成13年11月30日(必着)
6. その他：受賞者は平成14年春の日本植物分類学会総会において表彰されます。また受賞者には原則として同時期の大会において受賞講演を行っていただきます。

新学会ホームページのお知らせ

新学会設立にあわせて、学会のホームページも新しくなりました。

(旧)日本植物学会のアドレス <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jspt/>

(新)日本植物学会のアドレス <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsps/>

たくさんのアクセス、お待ちしております！

昭和聖徳記念財団平成 13 年度学術助成のご案内

自然史学会連合担当 西田治文

同財団から自然史学会連合加盟学協会宛に上記助成金の案内が参りました。対象は「系統分類に関する研究」で、今年度より学術助成目的を奨励とあらため、助成額も原則として1件あたり50万円以内となりました。年齢制限はありません。応募期限は平成13年12月10日(月)です。

応募書類は財団に直接請求されてもかまいませんし、自然史学会連合担当の西田までご請求いただいても結構です。後者の場合は送付先を明記してください。郵送料は不要です。

請求先

- 〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-5-1 新丸ビル
財団法人 昭和聖徳記念財団「学術研究」係
電話 03-3211-2451 ファックス 03-3211-7747
- 〒112-8551 東京都文京区春日1-13-27
中央大学理工学部 地学生物学教室 西田治文
E-mail: helecho@kc.chuo-u.ac.jp

平成 13 年度 (第 23 回) 沖縄研究奨励賞推薦候補者募集

庶務幹事 梶田忠

財団法人沖縄協会から、平成13年度(第23回)沖縄研究奨励賞推薦応募についての協力が届いています。この賞は、沖縄を対象とした将来性豊かな優れた研究(自然科学、人文科学又は社会科学)を行っている50歳以下(7月15日現在)の新進研究者(又はグループ)3名以内に贈られるもので、学会、研究機関若しくは大学又は実績のある研究者からの推薦を必要とします。当学会からの推薦を希望される方は、9月10日までに、庶務幹事までご連絡下さい。なお、この賞に関する詳しい内容は、下記問い合わせ先にお問い合わせ下さい。

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-6-15 グローリアビル7F
(財)沖縄協会「沖縄研究奨励賞」担当 石坂次郎
電話 03-3580-0641 ファックス 03-3597-5854
URL: <http://village.infoweb.ne.jp/~fvgm0090/>
E-mail: fvgm0090@mb.infoweb.ne.jp

自然史学会連合シンポジウムのご案内

自然史学会連合担当 西田治文

本年度は下記日程でシンポジウムが組まれております。また、連合のホームページでもごらんになれますのでご参照下さい。

<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/ujsnh/index.html>

自然史学会連合第7回シンポジウム

「遺体が語る自然史」

日時： 2001年11月10日(土)午後1時から5時頃まで(参加自由)

会場： 国立科学博物館新宿分館 講堂

主催： 自然史学会連合

共催： 日本哺乳類学会, 国立科学博物館

「死」は一般社会においてはネガティブな概念であり、そこに生じる「遺体」はあくまでも日常の社会生活とは縁の遠い存在である。しかし、ナチュラルヒストリーは、まさしく「遺体」を研究対象とすることで発展してきた歴史を有する。「遺体」に取り組む最前線の研究者の研究成果を、一般社会人・学生を対象に平易に紹介する。分野としては、動物学・植物学・古生物学・医学・解剖学・考古学からの話題提供がなされ、これら各分野を有機的に結び付けてきたナチュラルヒストリーの全体像を紹介する機会となる。また分析型生命科学が隆盛をきわめるなかで、研究対象としての遺体を取り巻く環境は大きく変わりつつある。参加する社会人や学生らとともに、多彩な研究成果を自然科学にもたらしてきた「遺体」の、現在・過去・未来を議論する。

プログラム

	演 題	講演者
13:10-	遺体が創る科学	遠藤秀紀(国立科学博物館動物研究部)
13:55-	遺体が語る「本人も知らない自分」	中島 功(昭和大学歯学部口腔解剖学)
14:40-	(休息)	
14:50-	太古の遺体 - 化石がもたらす生物進化の情報 -	塚越 哲(静岡大学理学部生物地球環境科学)
15:35-	遺跡出土の遺体が語る人の生活と環境	辻 誠一郎(国立歴史民俗博物館)
16:20-	フリーディスカッション 遺体標本で博物館の高度化を図る	

問い合わせ先：国立科学博物館内自然史学会連合事務局

(担当) 遠藤秀紀、篠原現人、加瀬友喜

住所 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1

動物研究部動物第一研究室

遠藤秀紀 気付

電話 03-3364-2311, 03-3364-7127

ファックス 03-3364-7104

E-mail: endo@kahaku.go.jp

第5回以前のシンポジウムのプログラムは、「これまでの活動」のページで紹介しています。第5回シンポジウムの内容は、生物科学52巻2号で特集されています。

バックナンバー販売のお知らせ

図書幹事 布施静香

(旧)植物分類地理学会の学会誌でありました、「植物分類, 地理」のバックナンバーを販売しております。

1巻～13巻復刻版は、デジタルデータとして読み込んだ原本をもとに、コンピュータ製版により紙質の劣化の影響を最小限に抑えた印刷となっております。また、各巻ごとに上製本しており保管にも便利です。すでにあと10セットを残すのみです。品切れの際にも再度復刻の予定はありませんので、ぜひこの機会にお買い求め下さい。

また14巻～50巻も各巻ごとに上製本いたしました。こちらセットで販売いたします。とくに研究室や図書館などには最適です。販売数は残り7セットとなっております。数に限りがありますのでお早めにお申し込みください。

植物分類, 地理 1～13巻(製本)セット

学会会員(個人)	6万5千円(送料込み)
学会会員(団体)あるいは会員外	10万円(送料込み)

植物分類, 地理 14～50巻(製本)セット

学会会員(個人)	24万円(送料込み)
学会会員(団体)あるいは会員外	30万円(送料込み)

製本各巻の分売はいたしません。

また、1巻～50巻をカバーした、インデックスも販売いたしております。

植物分類, 地理 インデックス	3千円(送料込み)
-----------------	-----------

なお14巻以降は通常のバックナンバー販売(バラ売り)も行っておりますので、御入用の方はご連絡ください。また、(旧)日本植物分類学会会報も若干数ございます。こちらバックナンバー販売(バラ売り)を行っておりますので、同様にご連絡ください。

公費での購入を希望される方は、必要書類、記入事項の指定等をお知らせください。

お問い合わせ・申込先

〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目

人と自然の博物館

日本植物分類学会 図書幹事 布施静香

電話 0795-59-2011 ファックス 0795-59-2019

E-mail: fuse@nat-museum.sanda.hyogo.jp

野外研修会報告

邑田 仁（東京大）

新規に発足した日本植物分類学会の記念すべき野外研修会は、7月20日～22日に埼玉県秩父郡大滝村栃本の、東京大学大学院生命科学研究科附属科学の森教育研究センター秩父演習林で行われた。東京から3時間はかかるという不便な所だったので、2泊3日でも実際は中1日だけ野外観察という効率の悪い研修となった。そのためか、参加者は13名と予想外に少なかった。

20日の夕方現地の民宿（甲武信）に集合したが、邑田と大井氏、長谷川氏は車で参加した。日暮れまで少し時間があったので、その日の夕方に、宿の近くの不動の滝に出かけた。暑いうえに途中は林床が乾いており見るべき物はあまりなかったが、滝壺はさすがに涼しく、しかも滝壺近くの倒木の間からキバナノショウキランが咲いているのを発見して、ようやく研修会らしい雰囲気になってきた。

翌21日の観察は、栃本から西にほど近い、入川溪谷で行うことになった。朝8時半に演習林の澤田晴雄技官と五十嵐勇治技官が10人乗りの官用車で宿に来られ、溪谷入り口のゲート手前の駐車場まで、邑田の車と2台に分乗して出かけた。その後徒歩で約3時間、シオジが点々と生える溪流沿いのトロッコ道を西に向かい、ちょうど12時ごろに赤沢と入川の出会（赤沢出会）にたどりつき食事となった。赤沢出会には荒川源流の石碑があり、いかにも秩父の山奥に来たという感じであった。演習林のご配慮で標本採集が許可されたので、参加者は銘々に興味のある種類を採集した。秩父の森林は土壌のせいかな一般に森床が貧弱であり、しかも夏ということで花が少なく地味な感じであった。もっとも花らしい花がヒナノウスツボと、妙に花の小さなツリフネソウだったと言えば想像できよう。それでも、参加者の皆さんは十分に楽しまれたようである。澤田技官、五十嵐技官からもいろいろお話を聞くことができた。

昼食後、来た道を引き返し、ふたたび車で、近くの「見本林」と呼ばれる場所に移動した。学生実習等のために名札が立っている樹木を観察したほか、関西では見られないというオノオレカンバが生えている尾根に案内してもらった。夕刻、宿にもどり、懇親会を兼ねた夕食をとった。お忙しいところを澤田技官、五十嵐技官も参加され、和やかな懇親会であった。翌朝、永益さんは、最短距離で長野県に越えるべく、十文字峠に向かった。現在まで事故の知らせがないので無事に目的を果たされたことであろう。長谷川さんは雁坂トンネルを越えて山梨県に出、中央高速を経て横浜に帰られたそうである。

今回の研修会において観察された植物を長谷川さんがまとめられたので、主なものを以下に記しておく。筆者にとって観察会で最も感銘深かったのは、植物もさることながら、参加された方の優れた同定能力であった。21日夕刻に演習林の五十嵐さんが、ちょっと標本を見てくれないかといってイネ科、カヤツリグサ科などの標本を持って来

られたが、それらが風のような素早さで同定されたのにはただただ驚くばかりであった。未整理標本が山積する標本室の現状を考えると、時には標本室に来て同定していただけたらどんなに助かるだろうかと、虫のいいことを考えてしまった。こうした神業に触れるのも野外研修会の大きな意義と思われるので、来年も研修会が盛大に行われることを期待したい。

研修会での利用を快諾された秩父演習林の関係者の方々、とくに案内を担当された澤田さんと五十嵐さんにお礼申し上げます。

参加者(13名、敬称略): 井上尚子、大井哲雄、大井雅也、黒崎史平、田中昭彦、永益英敏、西田謙二、長谷川義人、平野弘二、福岡誠行、邑田仁、森本範正、渡部壽子
 観察された植物(主に長谷川義人氏のメモによる): ウスゲタマブキ、サワギク、テバコモミジガサ、モミジガサ、シロヨメナ、コヤブタバコ、フクオウソウ、フキ、ヤクシソウ、アキノキリンソウ、ノブキ(キク科); オトコエシ(オミナエシ科); オオバノヤエムグラ、オオアカネ(アカネ科); ケイワタバコ(イワタバコ科); ヒナノウスツボ、クワガタソウ、ミゾホウズキ(ゴマノハグサ科); シオジ、アラゲアオダモ(モクセイ科); フジウツギ(フジウツギ科); オオバコ(オオバコ科); カメバヒキオコシ、ラショウモンカズラ、イヌトウバナ、レモンエゴマ(シソ科); ムラサキシキブ、クサギ(クマツヅラ科); ハシリドコロ(ナス科); シラネセンキュウ、ミツバ、ダケゼリ、ウマノミツバ(セリ科); メダラ(ウコギ科); ツリフネソウ、キツリフネ(ツリフネソウ科); サンショウ、オオバノキハダ(ミカン科); ヤマウルシ、ツタウルシ、ヌルデ(ウルシ科); メグスリノキ、ミツデカエデ、チドリノキ、ヒトツバカエデ、イロハカエデ、オオモミジ、コハウチワカエデ、ヒナウチワカエデ、ウリカエデ、ホソエカエデ、アサノハカエデ、テツカエデ、コミネカエデ、オニイタヤ、ウラゲエンコウカエデ、オオイタヤメイゲツ(カエデ科); トチノキ(トチノキ科); ミツバウツギ(ミツバウツギ科); ノブドウ、サンカクズル(ブドウ科); アオハダ(モチノキ科); サワダツ、ツルマサキ、ユモトマユミ、ツルウメモドキ(ニシキギ科); ミズキ、クマノミズキ(ミズキ科); ウリノキ(ウリノキ科); タニタデ(アカバナ科); ヤブハギ、ヌスビトハギ、フジ、ヤブマメ(マメ科); ヤブヘビイチゴ、ヒメキンミズヒキ、ダイコンソウ、ヤマブキ、コゴメウツギ、クマイチゴ、エビガライチゴ、ウラジロノキ(バラ科); アカシヨウマ、ツルネコノメ、オオコガネネコノメ、コチャルメルソウ、ヤグルマソウ(ユキノシタ科); ヒメレンゲ(ベンケイソウ科); ギンバイソウ、ガクウツギ、コアジサイ、ヤマアジサイ、タマアジサイ、ツルアジサイ、ノリウツギ、イワガラミ、ウツギ、ヒメウツギ、バイカウツギ(アジサイ科); コナスビ、ミヤマタゴボウ(サクラソウ科); サワフタギ(ハイノキ科); ハクウンボク、オオバアサガラ(エゴノキ科); アセビ、ネジキ、ヤマツツジ、アブラツツジ、トウゴクミツバツツジ(ツツジ科); リョウブ(リョウブ科); バッコヤナギ、オノエヤナギ、イヌコリヤナギ(ヤナギ科); エイザンスミレ、ヒナスミレ、タチツボスミレ(スミレ科); キブシ(キブシ科); シナノキ(シナノキ科); クマヤナギ(クロウメモドキ科) マタタビ、サルナシ(マタタビ科); ナツツバキ(ツバキ科); タニソバ、ミヤマタニソバ、ヤブタデ、ミズヒキ、イタドリ(タデ科); ミヤマハコベ(ナデシコ科); ヤシャブシ、ヤマハンノキ、ミズメ、シラカンバ、ウダイカンバ、オノオレカンバ、アサダ、ツノハシバミ、アカシデ、イヌシデ、サウシバ(カバノキ科); ブナ、イヌブナ、ミズナラ(ブナ科); オニグルミ、サウグルミ(クルミ科); ミズ、ウバミソウ、ムカ

ゴイラクサ、クサコアカソ(イラクサ科); コウゾ; ヤマグワ(クワ科); ケヤキ、オヒョウ、エゾエノキ(ニレ科); マンサク(マンサク科); フサザクラ(フサザクラ科); カツラ(カツラ科); ヤマグルマ(ヤマグルマ科); ミヤマキケマン(ケシ科); アワブキ、ミヤマハハソ(アワブキ科); ミツバアケビ(アケビ科); ボタンズル、ヤマキツネノボタン(キンポウゲ科); マツブサ(マツブサ科); フタリシズカ(センリョウ科); ダンコウバイ、アブラチャン(クスノキ科); ホオノキ(モクレン科); クモキリソウ、キバナノショウキラン(ラン科); キクバドコロ(ヤマノイモ科); マルバサンキライ(サルトリイバラ科); タマガワホトトギス、ヤマユリ(ユリ科); ヌカボ、カニツリグサ、ヒメノガリヤス、ケチジミザサ、スズタケ(イネ科); イトスゲ、ヒゴクサ、カンスゲ、テキリスゲ、ヤブスゲ(カヤツリグサ科); ホソバテンナンショウ、ヒトツバテンナンショウ、ユモトマムシグサ(サトイモ科); ツガ、モミ(マツ科); ヒノキ(ヒノキ科); オウレンシダ、ワラビ(コバノイシカグマ科); シノブ(シノブ科); カラクサシダ、ハコネシダ(ホウライシダ科); イワトラノオ(チャセンシダ科); シシガシラ(シシガシラ科); イワイタチシダ、ミヤマイタチシダ、ミヤマクマワラビ、ジュウモンジシダ、ミサキカグマ、ツルデンダ、ナンタイシダ、イワシロイノデ(オシダ科); イワデンダ、フクロシダ、イヌワラビ、ヤマイヌワラビ、ミヤマシケシダ(イワデンダ科); ミツデウラボシ、ピロードシダ、ホテイシダ(ウラボシ科)

第19回植物学国際シンポジウム (The 19th International Symposium on Plant Biology) に参加して

兵庫県立人と自然の博物館 布施静香

第19回植物学国際シンポジウムは、2001年7月23日～24日に、大韓民国ソウル市の南に接するプチョン市にある韓国カトリック大学で開催されました。今年は、「生物多様性— 状態、保全、回復 (Biodiversity – Status, Conservation and Restoration)」というテーマでした。日本からの参加者は20名、アメリカ、カナダ、フィリピンからの参加者もあり、大勢の韓国の参加者と共に盛大に行われました。韓国側は盲目純先生が、日本側は邑田仁先生が中心になってお世話して下さいました。どうも有難うございました。プログラムを私なりに和訳したものは以下の通りです。ポスターセッションでの発表は全部で15件ありましたが、紙面の都合上、ここでは日本植物分類学会会員のもののみ取り上げました。

7月23日

開会式 座長: Do-Soon CHO (the Catholic University of Korea)

歓迎の辞: Sun-Hi LEE (韓国植物学会会長)

歓迎の辞: 駒嶺 穆 (前日本植物学会会長)

祝辞: Chang Seon OH (the Catholic University of Korea 学長)

本講演 座長: Chong-Wook PARK (Seoul National University)

岩槻邦男 (放送大学): 東アジアにおける植物多様性 - 研究と社会的影響

Yong No LEE (the Korea Plant Research Institute 所長): 韓国の固有植物

第一部：シダ植物とコケ植物 座長：田村 実（大阪市立大学）

村上哲明（京都大学）：シマオオタニワタリ群の分子アルファ分類学

Byung-Yun SUN (Chonbuk National University)：ハナヤスリ科の系統 - 特に済州島に産する新属 *Mankyua* を中心にして

秋山弘之（兵庫県立人と自然の博物館）：コケ植物における分類学的単位とその認識

第二部：分子系統 座長：Youngbae SUH (Seoul National University)

野崎久義（東京大学）：群体性オオヒゲマワリ目（緑藻綱）の形態と進化

Youngbae SUH (Seoul National University)：葉緑体遺伝子の塩基配列解析によるモクレン科の系統

田村 実（大阪市立大学）：韓国と日本の広義ユリ科の多様性

Byoung-Yoon LEE (Seoul National University)：セリ科-Aucalideae の分子進化と系統

第三部：遺伝的多様性の解析 座長：Eun Ju LEE (Seoul National University)

瀬尾明弘（京都大学）：琉球列島の分子系統地理

Myong Gi CHUNG (Gyeongsang National University)：植物集団における時空間の保全遺伝学

邑田 仁（東京大学）：広域分布種における葉緑体 DNA の種内変異

7月24日

本講演 座長：Young D. CHOI (Purdue University)

Anne NAETH (University of Alberta)：劣化した生態系の回復

第四部：生物多様性への総合的アプローチ 座長：村上哲明（京都大学）

横山 潤（東北大学）：韓国と日本のハギ属 *Macrolepedeza* 亜属（マメ科）の受粉生物学

川窪伸光・ナカシマカナコ・コモリゾノタケシ（岐阜大学）：植物とアリとの不特定な関係の多様性

Chin-Sung CHANG (Seoul National University)・Hui KIM (Seoul National University)・Yong-Sik KIM (Yeungnam University)：IUCN レッド・リスト・カテゴリーに基いた韓国の稀少および絶滅危惧植物種の再検討

遠藤泰彦（茨城大学）・大橋広好（東北大学）：東アジア産ソラマメ属（マメ科）各種の系統関係

見塩昌子（岐阜大学）：同所性灌木種の水利用に関する多様性

第五部：ポスター・セッション（抜粋）

青木京子（京都大学）：日本産暖温帯性樹木の分子系統

布施静香（兵庫県立人と自然の博物館）・Nam Sook LEE (Ewha Womans University)・田村 実（大阪市立大学）：韓国産 *Disporum ovale* Ohwi（広義ユリ科）の系統学的位置

美和秀胤（京都大学）・須原準平（立教大学）・北川尚史（奈良産業大学）・Sugong WU (Kunming Institute of Botany, Academia Sinica)・村上哲明（京都大学）：ヒメジャゴケ（苔綱）の分子体系学

Chan Ho PARK (東京大学)・渡辺幹男（愛知教育大学）・加藤雅啓（東京大学）：三倍体雑種ハコネシケチシダ（イワデンダ科）における無融合生殖

田中法生（筑波実験植物園）・相生啓子（青山学院女子短期大学）・大森雄治（横須賀市立自然博物館）・ナカオカマサヒロ（東京大学）・John KUO (University of Western Australia)：アマモ科の分子系統学的解析

山田敏弘（東京大学・日本学術振興会）・今市涼子（日本女子大学）・加藤雅啓（東京大学）：

ANITAの胚珠と種子の発形態学

Sun-Young YI・加藤雅啓(東京大学): ヒメミズニラのリゾモルフの分裂組織の形態

第六部: 生物多様性保全の問題点と処置 座長: 秋山弘之(兵庫県立人と自然の博物館)

河原孝行・吉丸博志・金指あや子(森林総合研究所): 樹木種の遺伝的多様性と保全

Eun Ju LEE (Seoul National University): ソウルの早春

Edwino S. FERNANDO (University of the Philippines at Los Banos): フィリピン諸島のヤシ科植物相における多様性・固有性・稀少性

Yong-Sik KIM (Yeungnam University): 韓国における植物多様性保全のためのレッスン: 現状と展望

第七部: 生物多様性の回復 座長: Edwino S. FERNANDO (University of the Philippines at Los Banos)

Jae Geun KIM (Kyung Hee University, Korea): タホエ湖域における亜高山湿地保全に関する堆積物解析の意味

Young D. CHOI (Purdue University): ミシガン湖南岸の生態系における生物多様性の保全と回復

Jeong Ha KIM (SungKyunKwan University): 韓国の攪乱された岩礁海岸の生育地における生物多様性の回復

口答発表をされた韓国の方々、全員、アメリカにお住まいだった経験があり、非常に流暢な英語を話されていたことが印象的でした。宿泊はソウル大学のゲストハウスを用意していただき、また、歓迎パーティーを屋外で開いていただくなど、大変お世話になりました。

7月25日は、エクスカーションで、北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)との国境付近にある、非武装地帯(DMZ)と文民統制地帯(CCZ)を訪れました。DMZは毎年火を入れるので、草原の中にまばらに木が生えている状態が維持されています。CCZでは稲作や人参栽培が盛んに行われていました。DMZとCCZのあたりにはヤエガワカンバ、クヌギ、カラコギカエデが多く生育していました。基地内には韓国の国花であるムクゲがたくさん植えられていました。参加者はのべ19名でした。

7月26日~28日はエクスカーションが済州島で行われました。参加者は曷度純、金知鉉、奇載祐(韓国カトリック大学)、李南淑、余星姫、李昌淑、廉恩英、呉世羅(梨花女子大学)、Edwino S. FERNANDO (University of the Philippines at Los Banos)、村上哲明、瀬尾明弘、美和秀胤、青木京子(京都大学)、河原孝行(森林総合研究所)、田村実(大阪市立大学)(以上敬称略)、布施静香(兵庫県立人と自然の博物館)の16名でした。

7月26日は、まずSan-gum-bu-riという噴火口へ行きました。済州島には大小さまざまな噴火口があり、かつて火山活動によってできた島であることを物語っています。次にDo-rang-shi Orumという済州島で最大級の噴火口へ行きました。噴火口の斜面の標高差は約190mあり、そこを一気に駆け上りました。山裾は植林地で、頂上部はススキ草原でした。頂上部には、現段階では私にはアオヤギソウなのか *Veratrum*

coreanum なのかわからないバイケイソウ属の植物やアマドコロが生育し、噴火口の淵のやや低い所にはイヌシデやアカシアのブッシュがありました。斜面はかなり乾燥していて、ツルボなどが生育していました。その後、島の北東部の海岸へ行き、蘭島(Nan-do)を眺めました。

蘭島はハマオモトが群生している小さな島です。ちょうど花期でしたので、島の下半分が白く化粧されているようでした。海岸沿いには、日本のものと比べると葉状枝のかなり短いクサスギカズラが花と若い実を同時につけていました。それから樵子林 (Pijarim) へ行きました。ここはカヤの原生林で有名な公園で、常緑広葉樹林の中に樹齢 300 ~ 600 年といわれるカヤの大木が散在していました。しかし、余星姫先生の話によると、カヤの幼樹はほとんど見られないそうです。林床にはナルコユリやホウチャクソウが生えていました。田村実先生の話に



韓国濟州島 Do-rang-shi Orum の頂上部 (標高約 350 m) に生育するバイケイソウ属の植物 (現段階では私にはアオヤギソウなのか *Veratrum coreanum* なのかわからない)

によると、韓国ではナルコユリやホウチャクソウは珍しいとのこと。最後に Dong-baeck-dong 山へ行きました。ここは濟州島の平地で最も面積の広い常緑広葉樹林が残されているそうです。ヤブツバキ、アラカシ、サカキ、コショウノキなどが生育し、林床にはエビネ、シュンラン、ミヤマウズラなどのラン科やヤブラン、イチヤクソウなどがありました。常緑広葉樹林の中に小さな沼が点在し、ヘラオモダカなどが生育していました。

7月27日は、まず、Mul-Young-A-Ri という噴火口へ行きました。ここは常緑広葉樹林と植林に覆われた山で、噴火口の底部は湿地帯になっていました。湿地帯の中央部にはカンガレイが、その周辺にはオモダカが生育していました。林との境目にはオオヤマレンゲがあり、オトコゼリが花盛りでした。林床ではギボウシ属の *Hosta minor* が花を咲かせ、キジカクシも生えていました。現在は植生保護のため、この地域には特別な許可がないと入山できないようです。今回も政府の関係者が同行されました。次に Don-ne-ko へ行きました。ここでは、漢拏山から流れてくる川に沿って常緑広葉樹林が発達し、市民が水浴びを楽しんでいました。今回、他の場所ではほとんど見ることができなかったキノコ類が、ここでは多く生えていました。最後に漢拏山東麓の

登山口 (Songp'anak) にある落葉広葉樹林へ行きました。シデ類が多く、林床にはチゴコリやユキザサなどが生育していました。

7月28日は、韓国最高峰の漢拏山 (Mt. Halla) に登りました。漢拏山は標高1950 mで島の中央部に位置しています。今回は山の南西から頂上に向かう霊室 (Youngsilgiam) コースを登りました。登山口 (1280m) から約1400mまでは落葉広葉樹林で、アカマツやイチイが混ざっていました。小川付近にはガクアジサイや *Veratrum patulum* が生育し、林床には *Sasa quelpartensis* が生い茂っていました。*Sasa quelpartensis* の切れ目にはキッコウハグマが生えていました。16年前にここを訪れた田村実先生の話によると、かつては *Sasa quelpartensis* がもっと少なかったそうです。約1400 mから約1630 mまでは岩が露出した急斜面で、イブキジャコウソウ、カワラナデシコ、キオン、*Polygonatum lasianthum* var. *coreanum*、キスゲ属、カラマツソウ属、フウロソウ属、イブキトラノオ属、マンネングサ属、黄花のヤエムグラ属などの植物が花を咲かせていました。約1630 mから約1680 mまでは、*Abies koreana* などの高さ2~3 m程のブッシュがあり、その林床にはマイヅルソウなどが生育していました。李南淑先生によると、かつてこの林床はマイヅルソウで埋め尽くされていたのだけれども、最近は少なくなってしまうとのことでした。約1680 mから1700 mまでは開けた草原になっていました。*Sasa quelpartensis* が非常に多く、その合間にアオヤギソウ (または *Veratrum coreanum*)、イグサ属、イブキトラノオ属、リンドウ属が生育していました。1700 mから山頂までは岩の崩落を防ぐために夏期は閉鎖されており、今回は1700 m地点までの登山となりました。

7月29日は、各人無事に帰宅することができました。

今回のエクスカージョンは天候に恵まれ、美しい景色を堪能できました。また韓国滞在中は食事が美味しく、とても楽しいものとなりました。



済州島漢拏山の標高約1690 m地点から頂上を望む
(写真は二枚とも大阪市立大の田村実さんが撮影)

連絡員から夏便り

新企画として、ニュース連絡員から隔号でお便りをいただくことにしました。今回は、コケに関する耳寄り情報と、北の国からの涼し気な(?)便りです。次回は、南の島とシダの便りが届くでしょう。ご期待ください。

コケ便り・1・

岡山理科大 西村直樹

日本蘚苔類学会第30回大会の開催

日本蘚苔類学会はコケ植物に興味がある人なら誰でも入会できる会として1972年(昭和47年)に設立され、本年は30年目となる節目の年です。この度、8月3-5日の三日間に渡り、大分県別府市で、第30回大会が開催されました。特別講演3件、研究発表17件(展示発表を含む)を始めとして、野外観察会および同定研修会、総会、懇親会、またロビー展(伊沢正名の世界 - コケ)が行われ、全国各地からかけつけた会員約70名が記念大会を祝いました。

来年度の大会は8月初旬に石川県小松市で開催される予定です。興味がある方は、学会のホームページ(<http://sc1.cc.kochi-u.ac.jp/~bryosoc/>)にアクセスして下さい。

最近のコケ関係新刊図書

「日本の野生植物 コケ」岩月善之助(編)、552 pp. (カラー図版192 pls.を含む)、

本体価格19,500円(税別)、ISBN 4-582-53507-0、2001年2月21日、平凡社発行
平凡社の「日本の野生植物」シリーズとして、草本、木本、シダに引き続き、コケが刊行されました。日本に産することが知られているコケ(蘚苔類)のほとんど、約1800種が最新の学名で取り扱われています。また、主に伊沢正名氏による、特徴を見事に写しだした963種1162点の写真がカラー図版に収められています。一般の方がコケの種名同定を行う際には、従来の「原色日本蘚苔類図鑑」(保育社、1972年)とともに、必携の図鑑になると言えましょう。

「ここにも、こけが・・・」(月刊たくさんのふしぎ2001年6月号:第195号)

越智典子(文)・伊沢正名(写真)、40 pp.、定価700円、福音館書店発行

ちょっと意識すると身の回りのあちこちにコケはあるよ、というところからはじまり、ミズゴケやコマチゴケが胞子をまく様子、いろいろな種類のさく(胞子嚢)のおもしろい形態、またコケの雌花、雄花、そして生活環にいたるまでコケに関する基本的な事柄を美しい写真と分かりやすい文章で解説しています。小学校高学年の児童を対象としているようですが、大学生や一般の方がご覧になっても、面白い!と感じていただけるように思います。

北方草木便り・1・

森林総合研究所北海道支所 河原孝行

夏が来れば・・・ミズバショウ・・・？

北海道にきて、5年になろうとしている。関東育ちの私にとって、ミズバショウは尾瀬のような高原湿地にわざわざ見に行くものであった。しかし、北海道では、ちょっとした湿地や沢の脇にザゼンソウとともに実によく生えている。ちょっと前までは湿地開発や護岸も進んでいなかったのもっとももっとたくさんあったことだろう。札幌近郊では4月の中旬から5月の上旬くらいまで雪解けの状況に合わせて咲いている。7月にもなってササをかき分け林下の沢に入っていくと、春の可憐さはどこへやら、巨大になったミズバショウの青々とした葉がふんぞり返っている。そういえば春植物 (spring ephemeral) でもないのでどうして訪花昆虫の少ないと思われる春先にわざわざ咲くんだらう。仏炎苞の中は集熱効果で暖かくこの時期に咲くことが虫を呼び寄せるのに都合がよいのだろうか。一方、近縁のヒメザゼンソウが咲くのは7月になってからであるので、春に咲く必然性はないように思える。また、今まで気にしてなかったけれど葉に濃い緑の斑が入る個体とそうでない個体があるのに気付いた。同じ形の斑の入った株が固まりを作っているのも、これはクローン識別に使えるのである。いつもは気に留めない時期もよく観察しなきゃねえ。



「夏が来れば思い出す～」のは「水芭蕉の花が咲いてる」のではなくて、どう考えても「ふてふてしい水芭蕉の葉」なのである。

編集後記

今年の夏は暑くて雨が少なく、草木がすっかり元気をなくして可哀想ですね。

さて、2号目のニュースレターです。まだ前学会の癖が抜けず、「ええっと、今までの例でいうと・・・」などと考えて編集してしまったりします。ピカピカに新しい学会なのですから、気持ちを一新して編集せねば、と反省してます。

新ニュースレターでは、他の植物関連の学会の情報なども充実させたいと思っています。「これもお知らせに載せて」というものがありましたら、ぜひご連絡ください！

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学博物館
西田佐知子

電話：052-789-5764 ファックス：052-789-5767
Email: nishida@num.nagoya-u.ac.jp

入会申込、住所変更、退会届、会費納入、購読
申込などは下記へご連絡ください。

〒669-1546 三田市弥生が丘6丁目
兵庫県立人と自然の博物館
日本植物分類学会 高野温子(会計幹事)
Phone 0795-59-2012, Fax 0795-59-2019
E-mail: takano@nat-museum.sanda.hyogo.jp

平成13(2001)年8月20日印刷

平成13(2001)年8月27日発行

編集兼 名古屋市千種区不老町

発行人 名古屋大学博物館

西田佐知子

発行所 東京都文京区白山3-7-1

東京大学大学院理学系研究科附属植物園内

日本植物分類学会

郵便振替 00120-9-41247

・付録・

「植物分類,地理」巻号数と発行日の対応表

植物分類地理学会の会員だった皆さんには、先日、「植物分類,地理」のインデックスが配られたことと思います。ところが、そのインデックスには各巻・号の発行日が載っていません。そこで、巻号数と発行日の対応表を作成しました。切り取って、インデックスに挟んで活用してください。

* 40巻以降の「植物分類,地理」では、表紙・背表紙にある「・・・年・・・月」の英語表示と、実際に発行された年月日が違っている場合があります。下の表では、表紙・背表紙にある年月を備考欄に斜体で表示しました。しかし、正式な発行日は左の欄の「発行年月日」です。論文の引用等をされる際はご注意ください。

巻号	ページ	発行年月日	巻号	ページ	発行年月日
1	1	1-110	1932	4月20日	
	2	111-224	1932	6月20日	
	3	225-276	1932	9月20日	
	4	277-327	1932	12月1日	
2	1	1-72	1933	2月1日	
	2	73-148	1933	3月1日	
	3	149-226	1933	9月1日	
	4	227-324	1933	11月11日	
3	1	1-56	1934	5月30日	
	2	57-120	1934	6月30日	
	3	121-178	1934	10月30日	
	4	179-223	1934	12月15日	
4	1	1-50	1935	1月30日	
	2	51-122	1935	5月30日	
	3	123-194	1935	10月1日	
	4	195-246	1935	12月1日	
5	1	1-82	1936	1月30日	
	2	83-166	1936	5月30日	
	3	167-224	1936	10月15日	
	4	225-276	1936	12月15日	
6	1	1-64	1937	1月15日	
	2	65-144	1937	5月30日	
	3	145-244	1937	9月30日	
	4	245-293	1937	12月15日	
7	1	1-62	1938	2月28日	
	2	63-128	1938	5月30日	
	3	129-212	1938	9月30日	
	4	213-267	1938	12月5日	
8	1	1-74	1939	3月15日	
	2	75-140	1939	6月30日	
8	3	141-202	1939	10月30日	
	4	203-262	1939	12月1日	
9	1	1-70	1940	3月15日	
	2	71-110	1940	6月10日	
3	111-164	1940	9月30日		
	4	165-250	1940	11月30日	
10	1	1-88	1941	3月30日	
	2	89-158	1941	6月30日	
3	159-228	1941	9月1日		
	4	229-326	1941	11月1日	
11	1	1-64	1942	2月1日	
	2	64-144	1942	5月1日	
3	145-248	1942	8月31日		
	4	249-352	1942	9月30日	
12	1	1-70	1943	3月30日	
	2	71-124	1943	6月30日	
3	125-174	1943	9月30日		
	4	175-206	1950	11月30日	
13	1-320	1943	11月1日		
14	1	1-32	1949	9月30日	
	2	33-68	1950	2月28日	
3	69-100	1951	7月30日		
	4	101-132	1952	7月10日	
5	133-164	1952	9月30日		
	6	165-204	1952	12月20日	
15	1	1-32	1953	3月30日	
	2	33-64	1953	10月30日	
3	65-96	1953	12月25日		
4	97-128	1954	3月25日		
5	129-160	1954	10月20日		

巻号	ページ	発行年月日	巻号	ページ	発行年月日	備考				
15	6	161-208	1954	12月20日	29	1~5	1-148	1978	5月30日	
16	1	1-32	1955	5月30日	6		149-202	1978	11月30日	
	2	33-64	1955	10月30日	30	1~3	1-100	1979	5月30日	
	3	65-96	1956	4月30日		4~6	101-202	1979	12月20日	
	4	97-128	1956	6月30日	31	1~3	1-116	1980	5月30日	
	5	129-160	1956	9月10日		4~6	117-219	1980	11月10日	
	6	161-203	1956	12月30日	32	1~4	1-138	1981	6月15日	
17	1	1-32	1957	9月10日		5,6	139-208	1981	10月15日	
	2	33-64	1957	12月10日	33		1-416	1982	4月20日	
	3	65-96	1958	3月25日	34	1~3	1-108	1983	4月25日	
	4	97-128	1958	8月15日		4~6	109-220	1983	11月29日	
	5	129-160	1958	9月25日	35	1~3	1-102	1984	5月29日	
	6	161-191	1958	12月30日		4~6	103-190	1984	11月29日	
18	1	1-32	1959	7月31日	36	1~3	1-96	1985	6月29日	
	2,3	33-96	1959	12月20日		4~6	97-192	1985	11月30日	
	4	97-128	1960	2月29日	37	1~3	1-96	1986	9月30日	
	5,6	129-182	1960	8月15日		4~6	97-196	1986	12月25日	
	7	183-220	1960	12月25日	38		1-400	1987	9月25日	
19	1	1-32	1961	6月30日	39	1~3	1-106	1988	6月25日	
	2,3	33-96	1962	1月30日		4~6	107-178	1988	11月30日	
	4~6	97-195	1963	3月30日	40	1~4	1-124	1989	7月30日	1989年
20		1-351	1962	5月30日		5,6	125-208	1989	12月25日	1989年
21	1,2	1-64	1964	10月30日	41	1~3	1-108	1990	9月25日	1990年
	3,4	65-128	1965	3月31日		4~6	109-202	1990	12月25日	1990年
	5,6	129-199	1965	8月31日	42	1	1-84	1991	6月25日	1991年
22	1,2	1-64	1966	1月30日		2	85-188	1991	12月5日	1991年
	3	65-96	1966	7月30日	43	1	1-88	1992	8月5日	1992年8月
	4~6	97-207	1967	5月31日		2	89-178	1992	12月30日	1992年12月
23	1,2	1-64	1968	8月31日	44	1	1-92	1993	8月30日	1993年8月
	3,4	65-128	1968	11月30日		2	93-218	1993	12月30日	1993年12月
	5,6	129-198	1969	3月30日	45	1	1-94	1994	9月30日	1994年9月
24	1,2	1-64	1969	7月20日		2	95-186	1995	4月28日	1994年12月
	3	65-104	1969	11月30日	46	1	1-116	1995	7月28日	1995年7月
	4~6	105-203	1970	9月20日		2	117-236	1996	1月28日	1995年12月
25	1	1-32	1971	9月30日	47	1	1-134	1996	7月10日	1996年6月
	2,3	33-96	1972	7月25日		2	135-304	1997	1月28日	1996年12月
	4~6	97-198	1973	3月30日	48	1	1-88	1997	8月30日	1997年8月
26	1,2	1-64	1974	3月31日		2	89-212	1998	2月28日	1997年12月
	3,4	65-132	1974	9月30日	49	1	1-80	1998	7月28日	1998年6月
	5,6	133-196	1975	3月31日		2	81-204	1999	2月28日	1998年12月
27	1,2	1-60	1975	9月30日	50	1	1-146	1999	8月30日	1999年8月
	3,4	61-122	1976	3月30日		2	147-252	2000	2月28日	1999年12月
	5,6	123-182	1976	9月30日	51	1	1-126	2000	9月12日	2000年6月
28	1~3	1-90	1977	4月30日		2	127-245	2001	4月2日	2000年12月
	4~6	91-192	1977	10月30日						